

* * * *

西表島（沖縄県）は熱帯系の面白い蘚苔類が豊富に生育しているように思われる。所が長旅を苦勞して訪れた人々はその蘚苔類相、特に大一中形のものが意外に貧弱なのでガッカリするのが常である。水谷正美、吉村庸両博士の採集行もそうであった。特に水谷氏はごく小さい苔類まで“なめる”ように採集して、そのうちヤスデゴケ類を私に供された。どの包みも小形の種がほんの僅かであって、やっと上記の5種が見つかった。沖縄や奄美大島によく見られる中一大形種が全く無いのは意外である。イリオモテヤスデゴケ (sect. *Lucidae* に属する小形の新種 *Frullania iriomotensis*) が唯一の収穫で、同節の他種から腹葉が細長く深2裂すること、その他大分変わった種である。他の4種は日本南部によく見かけるもので台湾迄南下する種もある。何故西表や石垣島の蘚苔類がこんなに貧弱か一寸理解に苦しむが、低高度の小島であることが強く影響していると考えられる。そのため特に着生蘚苔類にとっては湿度（＝水分）条件が著しく不利である。

□Hedberg, Inga (ed.): **Parasites as plant taxonomists.** Proceedings of a symposium held in Uppsala August 25-27, 1978 in commemoration of Carolus Linnaeus, Carl Peter Thunberg, Elias Fries. Acta Universitatis Upsaliensis. Symbolae Botanicae Upsalienses 22: 4. 221 pp. 1979. Uppsala. (Distributor: Almqvist & Wiksell International, Stockholm-New York). 開催地ウプサラ大学の Olov Hedberg 教授の序文にもあるように、Linnaeus 死後200年、Thunberg 150年、Elias Fries 100年を記念して、1978年に行われた式典の記念講演と、同時に行われた国際シンポジウムのすべての講演を印刷したものであり、その組織運営に際し活躍された夫人の Inga Hedberg 博士の編集したものである。ウプサラ大学の生んだ偉大な三人の植物学者を偲んで、同大学の B. Jonsell 博士が Linnaeus について、木村陽二郎が日本とスウェーデンの植物学の発達を比較しつつ、Thunberg の功績について、ウプサラ大学の昆虫研究室の L. Hedström 博士が昆虫学者としての Thunberg について、また同大学植物分類学研究室の J. A. Nannfeldt 博士が、Elias Fries の菌学への貢献についてなした記念講演が巻頭にある。

32ページ以下はシンポジウム「植物分類学者としての寄生物」の講演18篇からなる。寄生物は寄主の植物の種を誤りなく見定めてとりつくから植物分類学者というわけで、顕花植物学者、昆虫学者、菌学者が一堂に会するという着想はめあたらしく、各方面の学者が分類学、生態学の立場から論じあい、寄主の物質、寄主と寄生物との相互進化、虫こぶ、昆虫の食草問題、銹菌の種と寄主の種の関連などが話題となった。

(木村陽二郎)